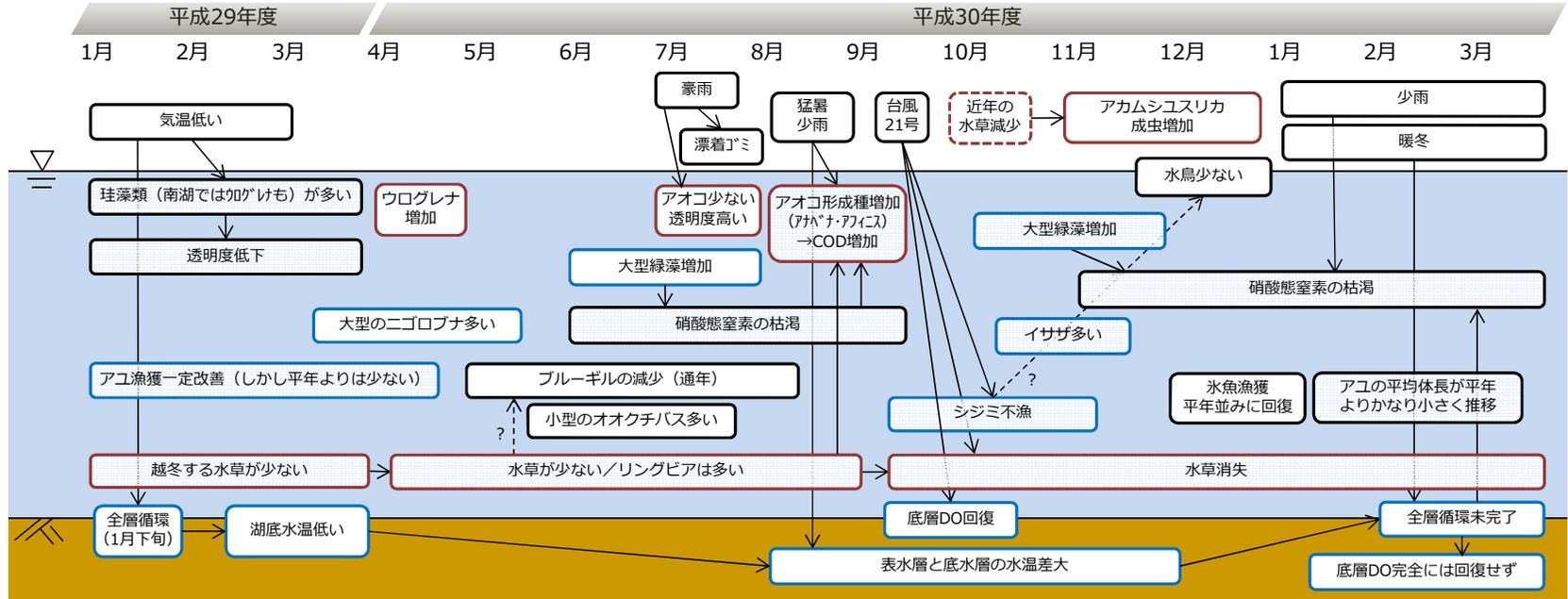


平成30年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性
 (「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームの成果等より)

凡例： 北湖・南湖の現象 北湖の現象 南湖の現象
 ———> 因果関係がある可能性が高い
 - - - - -> 因果関係ははっきりしないが可能性が疑われる

資料6

- 陸域社会
- 水質
- 魚介類
- 水草
- 底質



※この模式図は、琵琶湖の状況について関係者の意見等を整理したものであり、各事象間の関係性について科学的に実証されたものではありません。

滋賀県では、琵琶湖の生態系のバランスを是正し、本来の在来魚介類のにぎわいを復活させるため、行政、事業者の枠をこえた「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームを結成し、琵琶湖で生じた現象の把握や課題の整理を行っています。本プロジェクトチームで議論した内容を踏まえ、平成30年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性を時系列に沿ってまとめました。なお、このまとめは学術的な検証を得ていない結果を含んでいることにご注意ください。

平成28年12月から平成29年4月下旬にかけてアユが記録的な不漁に陥り、また平成29年秋季の天然産卵量が平年の2.2%であったことから、その後のアユ漁獲量の推移が心配されていました。幸いにも、平成29年12月から平成30年夏季までの漁獲量は、昨シーズンよりは改善し、平年の8割程度となりました。また、平成30年12月の氷魚（アユ稚魚）の漁獲量も平年並みにまで回復しました。

平成30年8月は、南湖が一面緑色に染まるという事態が生じました。これは「アナベナ・アフィニス」というアオコを形成する植物プランクトンが大増殖したためです。8月に降雨が少なかったこと、水草が少なかったこと、窒素濃度が低かった（少なくとも大気中の窒素を固定できる）ことが原因であると考えられています。しかし、同属の「アナベナ・フロスクアアエ」と異なり、浮上しにくい形状であることから、水面をマット状に覆ういわゆる「水の華（アオコ）」の発生にはなりませんでした。

平成30年9月に襲来した台風21号は強風を伴う風台風で、県内各地で大きな被害をもたらしました。特に、北湖のシジミ漁場が瓦礫だらけとなり、シジミ漁に壊滅的な影響を与えました。またこれにより、少ないながら繁茂していた南湖の水草がほぼ消失しました。

平成31年4月には、琵琶湖の全層循環が観測史上初めて未完了になったということで大きなニュースになりました。全層循環のメカニズム等についての詳細は、本資料の「琵琶湖の底質」項目にあるトピックを参照してください。5月末時点では底層の溶存酸素濃度（DO）は7mg/L前後であり、多くの生物の生息環境に悪影響を与える2mg/Lを下回ってはいませんが、例年よりは低い濃度であり、今後の推移が懸念されます。



台風21号で座礁した船舶と多量の水草（9月）



平成30年度に激減したブルーギル



南湖で大増殖したアナベナ・アフィニス（8月）



一面緑に染まった南湖（8月）